

キャリア研究の潮流

—国際教育・職業指導協会国際大会への参加から—

JILPT副主任研究員 榎野 潤

1. はじめに

二〇〇七年九月にイタリアのパドヴァにて、国際教育・職業指導協会 (International Association for Educational and Vocational Guidance) の国際大会が開催された。この国際大会は、世界からキャリア開発に関わる実践家や研究者などの専門家が参加の下で三日間行われた。

この国際大会に先立ち、国際教育・職業指導協会、職業心理学会 (Society of Vocational Psychology)、全米キャリア開発協会 (National Career Development Association) の協賛で、大会の前日にシンポジウムが開催された。

松本純平統括研究員、深町珠由研究員と私は、研究成果の発表とキャリア研究の動向に関する新しい情報の収集のために、シンポジウムと大会に参加した。

ここでは、私が聴講した講演や研究発表をもとに、特にキャリア研究の理論的展開に焦点を合わせ、その概略



を紹介することにした。

2. 国際教育・職業指導協会・職業心理学会—全米キャリア開発協会協賛シンポジウム

シンポジウムのテーマは、「職業心理学とキャリアガイダンスの実践：国際的パートナーシップ (Vocational Psychology and Career Guidance Practice : An international partnership)」であった。まず基調講演があり、その後、八つの分科会に分かれ、各分科会で一〇人前後の研究発表があった。参加者は基本的に一つの分科会に出席し、議論を通して、親睦を深めることが目的とされた。

(1) 基調講演

基調講演は、ヴァン・ヴィアネン (Annelies E.M. van Vianen) 教授 (アムステルダム大学) による職業選択の意思決定モデルに関するパラダイムシフトの話であった。彼女の研究によれば、現代人は職業選択をする上で選択肢があまりにも多過ぎるという。そのため、ある意思決定をしても、他にも選択肢があると考えてしまい、自分自身の意思決定にあまり満足できなくなっている。既存のキャリアに関する理論や研究は、こういう問題に何も解決策を与えていない。

なぜならば、合理的に選択肢を検討し、可能性を狭めるプロセスとして、職業選択の意思決定を想定しているからである。職業選択の意思決定のモデルは、これまでの線形モデルから、非線形モデルへ変わるべきであり、具体的には、合理的判断から直観的判断を重視したものへ、一度きりの選択から繰り返し選択することを配慮したものへ、意思決定に関する説明責任を弱めるものへと変わる必要があると主張する。

(2) シンポジウム

私は、八つのなかで、「職業心理学の新しい挑戦」という分科会に参加した。この分科会では、キャリア研究に関する新旧のパラダイムが話し合われた。ここでの新しいパラダイムとは、社会構成主義 (social construction)、構築主義やナラティブ・アプローチ (narrationist and narrative approaches) のことである。これに対し、既存のパラダイムとは、社会的認知を基本としたキャリア研究を指す。新しいパラダイムに関する主な発表として次の二つがあった。

- 新しい時代のためのキャリアアカウンセリング／リチャードソン (Richardson Mary Sue) 教授 (ニューヨーク大学)
 - 文化に敏感なキャリア理論へ／ヤング (Richard Young A.) 教授 (ブリティッシュ・コロンビア大学)
- 既存のパラダイムに関する主な発表として次のものがあった。
- 仕事に関して予期された変化は起こっていない…実践からの含意／サンプルソン

(Jim Sampson)教授(フロリダ州立大学)

新しいパラダイムの立場に立つ研究者は、これまでのキャリア研究が、文化や地域性といったコンテクストを考慮してこなかったという。そのため、西洋文化を前提とした研究であり、グローバル化に対応できないと批判する。それに対し、既存のパラダイムの立場に立つ研究者は、新しいパラダイムが理論先行であり、実践的側面が弱いことを指摘し、既存のパラダイムよりも、より効果的な実践を示して、初めてパラダイムのシフトが起こると主張する。このような対立は、この分科会に限らず、他の分科会でも同様に見られた。社会的認知からのキャリア研究は、個人の主観のプロセスを扱っており、そのプロセスに普遍性を見出そうとする。そのため、どうしても個人の背景にある文化や地域性といったコンテクストを軽視する傾向にある。それに対し、新しいパラダイムはコンテクストを強調した理論展開をするが、事例研究を中心とした質的研究が中心となり、実証性が弱くなってしまうという欠点がある。

2. 国際教育・職業指導協会の国際大会

(2) 国際大会のテーマ

今回の国際大会のテーマは、「ガイダンスにおける多様性 (Diversity in Relation to Guidance)」である。ジェンシュケ (Bernhard Jenschke) 会長は、大会発表論文集の冒頭で、このテーマについて次のように説明している。

「グローバルゼーションやグローバル化へのニーズが、経済や社会生活を動かす重要な原動力になっている。文化、経済、社会などの発展における様々な段階において、ガイダンスに対するニーズの多様性を考慮に入れなければならない」。

(3) 国際シンポジウム

国際大会の初日と二日目に国際シンポジウムが開催された。それらのタイトルとチェアを紹介する。

●初日…学校と仕事における幸福感／レント (Robert W. Lent) 教授 (メリーランド大学)

●二日目…①ガイダンス理論の発達における多様性と新しいパラダイム／パットン (Wendy Patton) 教授 (クイーンズランド工科大学)

②国際的な職業ガイダンスと多様性／グイシャード (Jean Guichard) 教授 (INETOP)

初日のシンポジウムは、レント教授の社会・認知的キャリア理論 (Social Cognitive Career Theory) を、二日目の①は、構築主義アプローチを、同日の②は、自己理論を、それぞれ中心とした研究発表が行われた。

社会・認知的キャリア理論は、進路選択に関わる主観的なプロセスをモデル化したものであり、キャリア研究における代表的な社会的認知の研究である。多様なアプローチとしては、社会や文化などのコンテクストをその認知プロセスに影響を及ぼす変数として取り込むことにより、対応が可能であると考えられる。

これは、国際学会に先立って行われたシンポジウムにおける、新しいパラダイムからの批判に答えるものであると言えよう。

5. キャリア研究の方向性

国際大会、それに先立つシンポジウムをふり返ると、キャリア研究の理論として、社会的認知からの既存のパラダイムと社会構成主義や構築主義からの新しいパラダイムがあることがわかる。これらのパラダイムは並行して存在しているようだが、共通点もある。それはともに個人のキャリア発達／開発に効果的に働く概念に焦点を当てていることである。社会・認知的キャリア理論ならば、職業興味や自己効力感といった構成概念であり、構築主義アプローチならば、ストーリーとしてのキャリア概念が代表的である。

私は、両アプローチの違いを、その概念が、個人の認知プロセスで働くのか、あるいは求職者と求人者といった個人間のプロセスで働くのか、ということにあると考えている。大切なことは、現実の職業構造や職場環境において、個人がそれらの概念を活用し、機能的になる自分の能力を発揮したり、働きたいを持つことであり、理論上の検討もそういう実践的な視点からなされるべきであると考えている。その際、新しいパラダイムでは、個人間で概念が活用される過程とは、言語によるやりとりのことを意味している。よって、新しいパラダイムでは、そのやりとりを研究する方法論が必要になると言えよう。